



中村 哲

87年3月10日 一時帰国中

(3月末に赴任)

ふとしたことから突然病棟が静かになった。それまで病棟では、口論が絶えなかった。而も回診中はみな一斉に腹痛や頭痛を訴え、どれが本当の訴えかわからず、心気症的な訴えと思っていたものが後になって粟粒結核、肝炎、マラリヤ等であることがわかって、大いに悩まされたものである。ハンセン氏病患者は、いかに外来中心とはいっても、絶えずある種の心理的な重圧の下で暮らしている。当然といえば当然なのだが、そのいらだちを心気症や喧嘩にむけられたのでは、診療する側にとっては大変な困難となる。

静かになった理由は極めて単純であった。ある日、ラワルピンディから移ってきた一患者が、麻の細いロープを使ってバッグを造り始めたのである。なかなかの出来ばえだったので、退屈な療養生活のせめてもの暇つぶしにと、他の患者に教えさせてみた。案外手順は簡単だが一つ作るのにたいい数日はかかる。しかし、意外に出来ばえがどれもいいのである。

麻紐は1kg当たり18ルピー(約17円)で、2個のバッグができる。できればの優れたものは1個8ルピーで買いあげ、慢性患者にバッグ作りを奨励した。これが大当りで、約30kgの麻紐は1か月もたたぬうちになくなってしまった。

これは全く、診療する側にとっては、

笑いの止まらぬうまい話であった。まず鎮痛・鎮静剤の使用量が激減した。編みもの仕事で忙しく、ちょっとした心氣的訴えにとられる暇がないのである。この編みもの仕事が病棟内で流行しはじめて以後は、大声でどなりあうことがめっきり減った。しばしば、温いストーブを囲んで世間話をなごやかにする風景さえみられた。さらに、足のうら傷の治るスピードが早くなった。編みものでベッド上の安静が充分守られるようになったからである。

時々ペシャワルに来る日本人の中で、私の名前をきいて訪ねて来る者がある。さぞや立派なお医者さんで、次々と困った患者の診療にとびまわっているであろう、と有難めいわくな高貴なイメージをいだいてくる。午前中ならば白衣姿の診療風景で一応の体裁がつくが、午後の暇な時間にくるものは、たいてい自分のイメージと合わぬ私をみて失望を隠せない。うす汚い現地服の小男が煙草をふかしながら染めものをしていたり、靴のワークショップで皮をひっくりかえして調べながら、不作法な冗談を言いあったりしている。

「海外医療協力」というもののいい名前からは、ほど遠いと思えることがしばしばである。ペシャワールくんだけ来て何をしたかと言えば、靴屋を開き、今は編みものに手をつけて

いる。

これはひとえに訳あって、ハンセン氏病の診療に欠かせぬものなのであるが、説明すれば長びく。ハンセン氏病とは何かということから始まって足底潰瘍とそのケア——靴、あみものといううちに相手もわかったかわからずか、フムフムとうなづくのみである。

ハンセン氏病の仕事は決して派手なものではない。早期発見の努力から手足の変形や足底潰瘍の防止まで様々な

局面があり、そのどれもが大切なのである。病棟で、麻紐をムダに使う患者にガミガミとくもう少していねいに作りなさい>とどなったり、良い靴皮の材料を求めてバザールをうろついたり、フィールドで身を守るために武装部隊を組織したり、等々、およそ医者の仕事と思えぬことの方が多い。しかし、夫々の土地柄に合わせて、その一つ一つが診療の一部として重要なのである。